

薫香を関西から 構造家・榊田洋子

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■想いは「桃李舎」

榊田洋子さんの実家は、大阪市で三代続いた鳶の榊田組。頭（親方）の父親は鍛えた職人たちと、鉄骨の建方をし、丸太で一流の足場を組んだ。夜空にサーチライトに照らされた鉄骨は美しかった。今でも鉄骨造のフォルムが好きだという榊田さんの原点です。

デザインを学びに入学した京都工芸繊維大学だったが、授業で構造計画に出会い「すっと地に足が着いたような感覚」になった。構造設計がまだまだ添え物的な分野、しかも女性では目指す人も稀なところ。「何故、構造家を目指したのですか？」と編集長は気になったが、「美しい構造体をつくりたいという一心」からなのでした。

就職先は「事務所がある建物が気に入って、こんなところで働きたい！」と川崎建築構造研究所に決めた。イケフェス大阪の会場になっているビンテージの建物で、所長の川崎福則さんから構造計画の真髄を学びます。4年が経ち、建築の背景にある都市計画に興味を湧き、許しを得て退所する。募集していた日建設計でコンセプトワークのチームに入り、念願の構造以外の仕事を1年経験。が、自分の建築での立ち位置はもっと身近なところをしたいと、榊田組が置き場にしていた建物で構造事務所を開設したのでした。

アジアハウスという留学生の寮の設計で建築主たちの熱い想いに触れる機会が、構造設計を自分の専門として確立させたいと強く思わせてくれた。独立後、大学院にも通い、何のために建築をつくるかと自分に問いかけながら勉強し続けた。

30年、ご近所に「洋子ちゃんは遅くまで電気つけてはる」といわれながら、榊田さんは構造と向き合い、がむしゃらにやってきた。女性技術者だけの組織を目指したのではなかったが、子育てをしながら働ける環境に女性エンジニアが集まり成長してきた。今、スタッフが「自分たちの会社」として自主的に働く組織になったのは、社名の「桃李舎」の故事のごとく、おいしい実をつけたから。社会貢献したいという榊田さんのベースにある想いが叶ったのです。

2015年に「行橋の住宅」で日本構造デザイン賞を受賞する。東京での授賞式には父を連れていき、受賞者としての講演を聞かせることができた。建築へと導いてくれた恩を少し返せたかもしれない。

建築家との協働、伝統的な木造建築の耐震改修、技術開発の三つの柱で「桃李舎」は頑張っている。

■一人からできる発信とまちづくり

構造家懇談会に川崎さんが参加していたので、JSCAに入会し、独立系のエンジニアとの交流を拡げるきっかけもできた。最初は古い木造建築の改修方法を探っていたのが、設計法をつくる立場にもなる。積極的に交流の場をつくることのできるのも、建築の目的を社会貢献と考える榊田さんだから。

榊田洋子さんのパートナーは都市計画の専門家の青木仁さん。数ある著書の中の『日本型まちづくりへの転換』（学芸出版社）を読んだのが交際のキッカケになったとか。シニア婚の披露宴は、桃李舎の1階のモータープールに手づくりされた会場で行われた。鬼籍に入られた新谷真人さんをはじめ、錚々

たる構造家も列席されたという、贅沢な思い出に残る会となったのでした。

自宅の1階には無垢板の長いテーブルを設置した“トーチカ”をつくっている。建築に限らず、例えばミニシアターの主宰者など、榊田さんの琴線に触れた人を講師に招いて講演会をしてもらおう。人と人の触れ合いを演出し、豊かな発信をし続ける構造家・榊田洋子さん。秘めたる情熱は枯れないのです。

